

私は「生活つづり方」のことを詳しくは知らないが、単なる作文教育ではなく「生活」をつづり、それをみんなと交流・共有することによって、自分たちの生活や生き方を見つめなおす取り組みと理解している。そして私はそんな取り組みこそが公教育の最大の目標になるべきだと思っている。

ところが、現場では知識と how-to を詰め込もうとやっきになっている大人の何と多いことか。いわゆる「作文」の時間は、やれ段落の書き方だの、やれ会話文の書き方だの、やれ誤字脱字がどうのだの、子どもが自分を語るのがいやになる取り組みばかりが目につくのは嘆かわしい限りだと思う。

自分の生活を語り、友人の生活を聞き、自分（たち）の生き方や生活を確かめ合うのが目標ならば、これは1年生に入学したらすぐにスタートすべき取り組みだと私も思う。「語り」「聞き」「確かめ合う」のは「書く」という形をとるとは限らない。「話す」などの何らかの意思表示でまずは十分だ。書けない子は聞いてあげればいい。それを大人が周りに言葉ででも文字ででも伝えればいい。大切なのは自分の発信を受信してくれる人間が周りにいて、そのやり取りが心地よく自分を刺激してくれるという実感を持つことだ。その実感さえ持てば「発信しよう」「話そう」「書こう」という意欲はどんどん高まり、さらにできるだけ正確にかつ丁寧に伝えたいという意欲が起きる。そうやって初めて「書き方の how-to」を登場させるべきだろう。

大人が一番にすべきことは自分がちゃんと受信しているかどうかの点検だろう。大人が子どもの思いを受信できていないのなら「生活つづり方」など成り立つわけがない。次に個人からの発信をみんなに届けること。小さい発信こそ増幅させる工夫などして、できるだけみんなからみんなに届ける。その手段として「書く」という手段がかなり有効な方法なのだろうが方法は問わなくてもいいと思う。届きさえすれば子どもたちはびっくりするぐらい考え、応え、響き合う。

それできていたからこそ森本さんのクラスでは子ども同士が学び合い成長し合っているのだろう。ある意味それは当たり前の結果なのだが、そんな当たり前の風景が最近はずれめったに見られないのだろうか。

森本レポでちょっと気になるところがある。それは森本さんが困った時に先輩のアドバイスを求めているところだ。先輩にアドバイスを求めるのはとてもいいことなのだが、そしてこの研究会もある意味そんな場なのかもしれないが、そのやりとりの中で森本さんが「how-to」に拘った尋ね方をして、先輩が「how-to」を伝授するという空気があったのなら、それには少し違和感を感じる。私は先輩からその手の質問や相談をされたら答えは決まっていた。「ワシに聞かずに子どもに聞け！」と。つまり「how-to」を外に求める前に、子どもと向きあい、自分が子どもとどう付き合っていきたいと思うかを確かめることが最も大切なことだと思うから。

「なあ、みんな聞いて。この子こんないいこと考えてるんやで。」とか「この子こんなことで困ってやるんやで。」ということをもみんなに伝えたい気持ちが大人にあるかないか。その気がないのなら「生活つづり方」などやめておいたほうがいいし、気持ちがあるのならその方法は「生活

つづり方」に限らず自分で考えるべきだろう。この子は聞き書きをしてあげようとか、この子の言葉は学級通信に載せて保護者にも知ってもらいたいとか、発信の方法はいろいろある。まあ、春以降は先輩のアドバイスに頼るまでもなく子どもとの向き合いでどんどん廻っていつているので大きな問題とは思わないがちょっと気になった部分だ。

どちらにしろ、たて糸と横糸が見事に絡み合っているのが心地よく感じる素敵な実践だと敬服する。

植松聖の作文と、生活つづり方

松森俊尚

7月の“学びをひろげるわたしと〇(まる)人の会”では、森本加代さんが1年生の子どもたちと取り組んだ「生活つづり方」の実践を報告してくださいました。

つづり方を軸にして子どもたちが関わり合い、先生も巻き込んで学び合うことによって、ひとりひとりの子どもが変わり、教師が揺さぶられ、教室が変わって行くすばらしい取り組みでした。詳しくは後日の「まとめ」で書きたいと思います。

ここでは意見交流で焦点化したひとつの話題を紹介しておきたいと思います。「生活つづり方」の実践報告で、よく指摘されるのが「方法化」の是非についてです、経験的にいえばですが。「子どもたちの思いを自由に書かせるといいながら、事細かなところでまで教師の目を行き届かせ、指導しているのではないか」ということです。なかでも、「推敲(すいこう)」という「方法」について、大きな議論が持ち上がります。もちろん私の経験的な受け止めですが。

今回の報告では、Aくんという中々クラスになじめない子どもが、先生と対話しながら「お話ノート」を書き続けて、「書きたい気持ち」生まれ、わからない文字を友だちにも聞き、ひらがなを獲得しながら、同時に友だちとのかかわりをつくって行きました。

そのAくんが、夏休みを終えて2学期に登校してくると、言葉遣いも周囲への当たり方も、きつくなり授業中に先生をにらみつけるような態度も見せるようになっていました。

1か月余りクラスで様々な出来事が起こるのですが、やがてAくんが家のこと、母親のことをつづり方に書き始めます。

そのときに、Aくんと先生が二人で向かい合って、「思い出し直し・推敲」に取り組みました。時間をかけて、何があったのか、どう言ったのか、何をしたのか…、じっくりじっくりと対話をしながら、文章を書きなおして行きます。

私は生活つづり方は、日本が世界に誇る教育実践であり、特に「推敲」こそがその実践の核心であり、思想的営みであると考えています。

しかしまさにここで、教師の出すぎではないか、子どもの自由を奪っているのではないか、子どもの言葉というより、教師の意見が優先されているのでは、確かに「感動的な」すばらしい文章が生まれるが本当に子ども自身が書いたといえるのだろうか…等々、多くの意見が交わされるところとなります。

“学びの会”でもその「方法」が課題になったのですが、そのとき参加していた障害当事者である下村さんが発言しました。神奈川県相模原市の知的障害者施設「やまゆり園」で起こった「障害者の虐殺事件4年目の追悼アクション」への参加を呼び掛けながら、更に続けました。

——「犯人は小学校時代から、近くに障害者がいる環境だったらしいそうです。そんな犯人は低学年のときに『障害者なんかいない』という作文を書いたそうです。いつも書いてくれた先生からのコメントは何もなかった。・・・もし、その時、先生がいつも通りの、何らかのコメントを書き、彼と話し合う機会があったなら・・・と悔しく思考しております」と。湧き上がる感情

を抑えきれずに、言葉をつまらせながら、つよい口調で話されました。

夏休み明けに暴力的な言動が目立ち、やがてクラスの居場所を失いかけていたAさんと森本先生が、つづり方を間に挟んで向かい合い語り合ったように、植松少年と担任の先生がふたりで「その作文」をはさんで向かい合い語り合うことがあったなら、その時どんなつづり方が生まれていたでしょうか。教室の中で、植松少年の「思い」について率直に話し合う機会がもたれていたら、どうなっていたでしょうか。

生活つづり方、あるいは「書く」ということの今後の議論につなげていきたいと考えています。

ちなみに、私は子どもと教師が二人で向かい合って「思い出し直し・推敲する」意味と値打ちを実感しているのですが、子どもたち自身がお互いに（いわば）「推敲し合う」取り組みを進めてきました。「話し合い」という取り組みです。いつか機会があれば書いてみたいと思います。

